

---

 学 会 記 事
 

---

## 第25回糖尿病談話会

日 時 平成8年4月6日(土)  
午後2時30分より  
場 所 万代シルバーホテル

## I. 一般演題

## 1) 抗 GAD 抗体の臨床的有用性

鴨井 久司・高木 正人 (長岡赤十字病院  
内科)  
村山 正栄 (同 RI室)

I型糖尿病の診断用に開発された抗 GAD 抗体測定  
の有用性を検討した。尿中 CPR 排泄量が 20  $\mu\text{g}/\text{日}$ 以下  
ないし血中 CPR 濃度がグルカゴン負荷後 1 ng/ml  
以下を IDDM とし、耐糖能異常が発見されて12カ月以  
内にインスリンを要した場合を急性発症型、それ以上を  
経てインスリンを要した場合を緩徐発症型とした。血中  
GAD 抗体価が 5 U/ml 以上を陽性とする、加療中  
の IDDM 31/57名(54%)、急性型は 19/28名(68%)、  
緩徐型は 12/29名(42%)が陽性を示した。女性が男性  
の2倍で、発症後の測定期間が短い症例に陽性者が多く、  
年齢差は明らかでなかった。NIDDM 患者49名中13名  
(27%)が陽性で、男女差は明らかでなかったが、グレイ  
ブス病、悪性貧血、慢性関節リウマチ、インターフェ  
ロン注射後など自己免疫疾患合併例に認められ、1例で  
は測定後2年目に IDDM に移行した。抗 GAD 抗体  
の著高例では ICA が陽性を示した。抗 GAD 抗体測  
定は I 型の診断に有用と思われる。

## 2) 抗 GAD 抗体測定の経験

佐藤 幸示・筒井 一哉 (県立がんセンター  
新潟病院内科)  
谷 良弘・殿内 芳成 (同 RI室)

抗 GAD 抗体を測定し、若干の成績を得た。対象は  
当院の糖尿病患者計 249 名で、インスリン治療患者81名、  
経口血糖降下剤または食事のみの 165 名、膝切などの 3  
名。4 単位以上を陽性し、13名が陽性。インスリン治療  
が多く10名で、その他は 3名。インスリン(I)治療の

男7.1, 女17.9, 合せて12.3%。経口剤、食事療法で  
は男のみ3例、3%で、男女合せると、1.8%。尿中C-  
ペプチド1日 20  $\mu\text{g}$  以下の症例はI治療患者で14例あ  
り、3例が陽性で、21.4%。ICA はI治療患者のみで  
57名中5名陽性で、8.8%。両方に陽性を示した患者は  
なし。I抗体はI治療の患者で10名、17.5%で陽性。  
I自己抗体を持っている糖尿病患者がいるとは言えず。  
抗甲状腺抗体、抗核抗体も抗 GAD 抗体と相関は無かつ  
た。今後、症例を増やし、経過観察をし、抗 GAD 抗  
体の臨床的な意義を検討したい。

3) ミトコンドリア遺伝子異常を有する糖尿病  
姉妹例

金子 兼三 (長岡赤十字病院  
内科)

家族歴)母, 母方叔母ならびに祖母が DM で死亡、  
父が最近 NIDDM 発症。病歴)症例① 姉, 33歳。小  
柄で痩せ型。昭50(13歳) IDDM 発症し、インスリン  
療法開始したが、血糖コントロール不良。昭61年難聴指  
摘。昭61.8 当院転院。易疲労、四肢筋発達不良、転倒  
し易いなどの症状あり。神経障害(++)。以後中間型  
+速効型インスリン朝夕皮下下注により、HbA1c 7%  
前後(冬期8%台)。平1.6並びに平6.4 麻痺性腸閉  
塞併発。平7.1 感音性難聴増悪し、mtDNA 3243 変異:  
17%発見。症例② 妹, 25歳。小柄であるが肥満傾向。  
昭56.4(10.5歳)感冒を契機に NIDDM 発見。食事、  
運動療法でコントロールされていたが、昭60よりイン  
スリン療法(中間型+速効型朝皮下注)開始。血糖コン  
ロール不良であったが、平5.9結婚後 HbA1c 6~7  
%台。平6.7 両側多発性卵巣のう腫手術。平7.9 mtDNA  
3243 変異:21%発見。難聴(-)。平7.12体外受精で  
妊娠し、CSII 開始。結語)変異遺伝子のヘテロプラス  
ミーにより DM の病型、臨床像の差異が生じたと思わ  
れる。

4) 頸動脈エコーによる動脈硬化の実態調査に  
ついて

湯田真紀子(舟江病院)

舟江病院で管理している糖尿病患者 358 名と高血圧等  
21名、計 379 名について頸動脈エコーを実施した。年令、  
男女、DM ランク別に IMC の厚さ、プラークの有無  
について調べた。